

私がみた坂の上の雲

—第14弾—

新年号

新東京病院院長

心臓血管外科主任部長 中尾達也



新年明けましておめでとう
ございます。新心会の皆様、
お元気ででしょうか？ 今回は
年末12月29日に外来終了後に
最終便で広島に帰省でき、正
月の1月2日に松戸に到着し
ました。1月1日には北陸能
登半島地震、1月2日には羽
田空港での航空機事故と非常
に恐ろしい災害が続きました。
1月3日に、さっそく回
診後に今年には院長室で原稿を
書いている心臓血管外科主任
部長の中尾達也です。

昨年は、コロナも5類にな
り新心会総会や主催旅行も少
しの制限下に皆様と時間を一
緒に過ごす機会があり大変嬉
しく思います。

さて、2024年新東京病
院は55周年を迎え、私もここ
松戸の新東京病院の地に来て
15年になりました。昨年6月
から院長になりました。従来のIC
UからICU専門医2名体制
の念願だったスーパーICU
に今年1月からなりました。
2023年度の実績を報告
致します。

昨年1年間の開心術が
292例、胸部大動脈ステ
ントグラフト術14例で、心臓胸部
大血管手術総数は306例で
した（3年前が312例）。

全体的に総数は戻ってきて
います。低侵襲手術の柱とし
て腹部大動脈ステントグラフ
ト（61例）、胸部大動脈ステ
ントグラフト（14例）、MI
CS（右小開胸、胸骨下部部
分切開）での大動脈弁や僧帽
弁手術は16例でした。

昨年12月からは以前当院に
いたこともある松本協立病院
の青木先生にお手伝いしても
らい完全内視鏡下での大動脈
弁置換術も開始しています。
胸部真性、あるいは急性、慢
性解離性大動脈瘤などあらゆる
形態の動脈瘤に対して開始
したオープンステントグラフ
ト手術は、良好な成績ととも
に本邦でもトップクラスの
症例数（2014年7月～
2023年12月までに339
例）になっています。この国
産ステントグラフトの海外と
くに保険償還が決まった台湾
での普及に、台湾の台北や台
中の病院まで足を運び技術指
導やアジア心臓胸部外科学会
やイタリアでの研究会等大き
な場所での講演に積極的に努
めてまいりました。

このことがきっかけで
AME Case reports (ACR)と
いうオンライン国際雑誌の編
集委員を務めています。

2024年5月にタイバン
コクで開催される第2回世界
心臓、循環器系疾患会議では
ゲストスピーカーとして私の
オープンステントグラフト手
術法の経験を解説する予定で
す。さらに今年は台中最大の
心臓血管センターとの臨床や
学術での協力体制をすすめ、
中国の病院からの心臓外科医
の見学も受け入れる予定です。

一方肺癌センター呼吸器外
科や築地中央癌センター食道
外科と共同しての、心臓や頸
部血管、大血管にまで浸潤し
た肺癌、縦隔腫瘍ならびに食
道癌を手術、治療することも
引き続き積極的に行い複数科
での相互協力体制をより信頼
できる強固なものにしていま
す。さらに、千葉県内でエホ
バの証人の心臓病患者に対し
て心臓手術を提供できる唯一
の施設としての役割も引き続
き務めています。

以上は、心臓外科主任部長
としてのいつものご挨拶でし
たが、昨年6月1日に新東京
病院の院長になりました。そ
れ以外の選択枝がなかったか
らです。

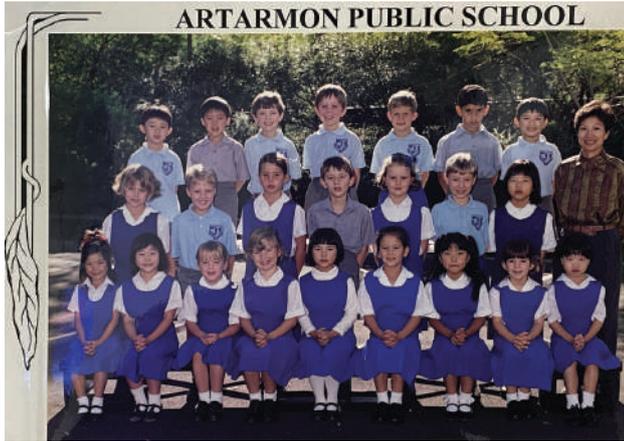
前院長からは、まだ院長に
もなっていないのに「お前を

院長にしたのは俺だからな
分かってるな」と言われ、
セコム医療システムからは
「セコムは先生に院長になっ
て欲しい」と言われ、結果的
にどっちも私に院長をするよ
うにと、それぞれの思惑は違
えどそれ以外に選択をするこ
とが出来ませんでした。

今、院長になって7か月で
すが自分の選択の是非を振り
返ることはありません。院長
前は、部屋の中において窓から
外を見つめていましたが、今
は階段で屋根の上に引つ張り
上げられそこから外をみても
る状態です。部屋の中において
は感じられない風の冷たさや
強さ、陽の熱さや温かさ、遠
くに見える怪しい雲の存在ま
でを感じあるいは予感するよ
うな状態でしょうか。たまに
風で吹き飛ばれそうときは
信頼できる仲間の存在を感じ
ます。

院長になった時、1か月半
かけて新東京病院の医師全
員（100人位）及び看護部
（20人位の婦長さんたち）と
一人一人面談しました。当然
いろんな考えを皆さまがもっ
ており、その裏にその人の人
生観も垣間見れました。

この時、10年近く続いた新



写真①：アーターモン小学校時代の娘、先生（ムースン）の向かって右隣り



写真②：6月から孫が通うアーターモン小学校前で、娘と孫

東京病院が抱えていた問題点の解決とそれに続く大きな転換が必要だと思いました。「信念と貶め」から「信頼と協力」へと向かう大きな舵取りです。

外来で、中尾先生が院長になって私も嬉しいですと多くの患者さんに言葉をかけていただきました。このことは院長をすることの大きなモチベーションになっています。

紙をいただき大変な感謝と感動をいただきました。

院長室に置いてある本に目をやると、本の表紙には、どこまでも続く広大な平原のど真ん中に轍が残る一本の路の絵があります。私の信念である「道の真ん中を歩く」ということがこの表紙の絵に凝集されています。

昨年末に私の娘が2人の孫をつれてオーストラリアシドニーに行きました。6月から仕事の関係でシドニーでの生活になり、孫は現地小学校に通います。

娘が30年前にシドニーで通っていたのと同じアーターモン小学校です（写真①②）。

12月30日に、広島での忘年会でいつもご一緒する広島大学呼吸器外科教授の岡田守人先生がニューヨーク在住の奥さんと2人の娘さんを連れて参加されていました。長女さんはアルバートアインシュタイン医科大学（写真③）に通っているとのこと、なんと30年前に私が働いていた病院に医学生として通っているのです。

コロナで止まっていたことが昨年の10月に、4年ぶりに広島基町高校の医療系進学コース40人の生徒（30人が女性）が、修学旅行の時に、新東京病院にまた訪ねてくれるようになり病院の現場に触れる機会を提供できるようにになりました（写真④）。

生徒たちが、いろんな夢を後日お手紙で書いてくれました。

人の御縁は不思議ですね。昔ニューヨークにいたとき食料買出しの車の中で毎週未聞いたドリムズ・カム・トゥルーの「晴れたらいいね」の歌詞を大きく超える物語をいろんな次世代が紡いでいてくれます。



写真③：30年前のアルバートアインシュタイン医科大学病院とアルバートアインシュタイン博士の銅像



写真④：基町高校の生徒と、私が院長になってから

晴れたらいいね 晴れたらいいね 新東京病院の屋根に座って願っています。